

# 塞北の詩人、宋小濂 — 郷土への思い —

平石淑子

はじめに

近年、いわゆる満洲国に対する関心が高まる中、満洲国建国以前に中国東北地域にどのような文化活動があったのかということについての関心は低いままである。その理由の一つとして、当地が歴史的に少数民族の居住地であったこと、加えて地理的な境界は文化的な境界に等しいと、無批判に置き換えられたことがあるのではないか。一九〇六年に当地を旅した徳富蘇峰は、奉天の文溯閣を訪ねた印象を次のように述べている。

宮殿は、朝鮮も、支那も、其の荒廢は同様也。目下修繕中の由にて候得共、それも覺束なく存じ候。(中略)但だ快心洞目に足るは、文溯閣の載籍に候。(中略)但だ塵埃の積る寸余なるには、閉口致し候。総じて支那にては、流石に四億余の人口ある故には、人間程廉価のものは、此れなく。斯る宝物庫や何やを見物するにも、役人やら油虫やら、ぞろぞろと左右前後より取り捲き、嘔々きようきようちやうちやう、喋々せつせつの奇声を発し、且つ名状す可らざる奇臭の包围攻撃に<sup>1</sup>は、閉口中の大閉口にて有之候。

ここに記された、中国の伝統文化が正しく理解も継承もされていないことへの日本文化人の嘆きは民国成立後も変

わらない。一九二四年に東北を旅した画家の小杉放庵は、「日本人の間には、只何となく満洲は支那の一部分の如き概念を離れなかった。そうで無い点の多いことを、たとえ一人二人にでも告げて見たいと思つて、満洲必ずしも支那に非ざる説を此文中に書いて置いた（傍線筆者）」と前置きをし、遼陽の関帝廟を訪れた際の感想を次のように述べる。

酷い荒廃で、赤兔馬は地に倒れ馬曳は半身となり、見事な浮彫りのある映壁の下は、糞臭人を近づけない、（中略）日本ならば藤原末期鎌倉初期などと論あつて、然るべき国宝の制札を受くべきものでありましょう。（中略）この祠ばかりは修繕が届いています。その代り、酒神の像も近く塗り替えられたと見え、肌も衣紋も興さめた生々しい彩色、今の此地の状態では、旧物の手入れも、うかとは勧められぬ事です。

「満洲必ずしも支那に非ざる説」という言葉は、自分たち日本の知識人こそが、中国の伝統文化の真の理解者であり、継承者であるという身勝手な思ひ上がりによるものであり、彼らのこういった印象記が、満洲国を産むこととなつた大東亜共栄圏の構想を後押しする一助となつたことは否めない。しかしそもそも日本人が古来憧れ、遵奉してきた中華の伝統的文化・文明を唯一無二の価値とする一元的な文化・文明観から東北を見ること自体が、実はおかしいことである。小峰和夫は「満洲のあるじは漢族ではなくツングースやモンゴルであった」といい、「当然ではあるが、清朝を生んだ満洲には、漢族（または漢人）の地である中華とは異なる独自の歴史や風土が存在した」、「しかるに、古くからの満洲独自の風土や景観は、実は清朝が北京に君臨したそのときから、皮肉にもむしろ変貌してゆく運命」となり、多くの漢族が流入したことによって、「満洲はかつての満洲ではなくなつていった」と指摘する。満洲国立中央博物館副館長を務めた藤山一雄は、当地に様々な民族が混在してきた歴史をふまえつつも、近代に至り、ロシアや漢民族の影響を受けて「その本来を辛うじて支持し來つた」当地の独特の文化が、「東方より天孫民族日本がア

ジア修正の第一歩を満洲に印し、この雑多な民族により構成された複雑多様な集合体をして、古きものを失ふことなく、且つ新しきものをも咀嚼吸収する、生きたる不二元主義の精神を以て裁断し、原始よりのアジアの理想、即ち『アジアは一つなり』といふ宏大にして高遠なる本来への第一段階に持ち上げるに至ったのである<sup>④</sup>と述べている。しかし、「古きものを失ふことなく、且つ新しきものをも咀嚼吸収する」というものの、当地の文化は「不二元主義」によつて強制的に「一つ」にまとめられ、結果として全く異質な「植民地文化」として生まれ変わることを強いられたと言えよう。

さて、清朝建国以降流入した漢族の多くは食い詰めた農民や貧しい労働者であつたが、我々はその中に清朝が興つて以降、多くの知識人流刑者が含まれていたという事実を思い起こさねばならない。張玉興は『清代東北流人詩選注』<sup>⑤</sup>「前言」で、「順治、康熙、雍正三朝の九十年間で、東北に流された者は十四万人を下らない」と述べ、中には不当な裁きを受けた者、また高い教養を身につけた者もあり、彼らは失意の中にあつても詩社を組織するなどして、各々の思いを詩に託したと述べている。彼らのそうした活動は、やがて当地で生まれ育つた人々にも影響を与え、さらに政治活動や経済活動のために中央から送り込まれた役人たちがその基盤の上に文化活動を展開したことが知られている<sup>⑥</sup>。本稿は東北に生まれ、中原から移つてきた知識人たちの影響下に作品を残した宋小濂（一八六〇〜一九二六）という人物に注目するものである。

吉林出身の宋小濂は、同郷の成多祿（一八六四〜一九二八）、徐鼐霖（一八六五〜一九四〇）と共に、文学史上「吉林三傑」と呼ばれる。彼ら三人はかなり長い時期を同僚として、また同じ詩社の同人として交流を深めていた。最も作品数が多いのは成多祿であるが、長期にわたつて東北に滞在し、特に辺境警備のために塞北の地を涉猟した経験を持つ宋には、東北の景観を描いた作品が多い。宋に関する先行研究は少なく、そのほとんどが彼の生涯と代表作品を紹介するもので、作品自体を論じるものは、管見の及ぶ限り、ない。またそれらはおしなべて彼を「愛国詩人」と評価するが、清朝、民国という二代にわたつて要職にあつた彼にとつて、「国」は単純な概念であるはずがない。

本稿では宋小濂の作品の中から特に東北を描いた代表的な詩を取り上げ、彼が東北に対してどのような思いを持っていたのか、さらに清から民国に変わったことで、彼は「清の遺民」となったわけだが、そのことが彼にどのような心理的影響を及ぼしたのかを探ろうとするものである。このことは、後に当地に満洲国が建国され、いわゆる「植民地文化」が誕生したことが当地の人々にどのような文化的、精神的影響を及ぼしたのかという筆者の問題意識につながっている。

## 一

宋の経歴は彼自身による『北徼紀游』<sup>(9)</sup>「前言」、及び『宋小濂集』<sup>(10)</sup>の編者「前言」などによって知ることができる。それらによれば、宋は吉林省双陽県の医者の子に生まれた。二十代半ばで童試に合格し、当時の知府李金鏞（一八三五〜九〇）に認められたことが、後の彼の一生を決めたといつてよい。父親を亡くし、家族の生活を支えるため奉天で軍隊に入った後、一八八八年、督理漠河礦務を拝命した李金鏞に招かれ、役人となった。『東北大事記』（以後『大事記』<sup>(11)</sup>）によれば、黒龍江を挟んで帝政ロシア（以後ロシア）と国境を接する漠河は肥沃で、金をはじめとする鉱物資源も豊富だったため、しばしばロシアとの紛争が起こっていた。『北徼紀游』には、金鉱付近の過酷な自然環境や、当地のロシア人、少数民族の生活の様などが細かく記録されている。また幕府には南から多くの文人官吏が集まっており、その中の宋を含む十一名によって「塞鴻詩社」が結成されたことも記録されている。

塞鴻詩社については柳成棟「黒龍江的詩社」<sup>(12)</sup>に比較的詳しい記述がある。それによれば、一八八九年九月、李金鏞が招いた劉械林<sup>(13)</sup>によって同年十月か十一月に結成された。詩社名の「塞」は「塞外」を、「鴻」は蘇軾の「人生到處知何似、應似飛鴻踏雪泥（人生到處 知んぬ 何にか似たる 応に飛鴻の雪泥を踏むに似たるべし）」<sup>(14)</sup>の「飛鴻」から取った。しかし十一名の同人の中で詩集が残っているのは唯一宋小濂のみである。結成後は毎晩集まって詩を作

りあつたが、一カ月後、内三名が移動し、また職務も忙しくなつたため、中断。十二月、宋小濂が天津に出張を命じられ、また結婚のため休暇を申請<sup>15</sup>、翌年春の終わり頃戻つてみると、劉は病のため南へ帰り、詩社の活動も行われなくなつていた。

一八九〇年の李金鏞病没後、宋は引き続き後任の袁大化（一八五一〜一九三五）の元で任務に就く。一九〇四年、程徳全（一八六〇〜一九三〇）に招かれ齊齊哈爾<sup>チチハル</sup>に赴くが、この時、前述の成多祿、徐霖の同僚となつている。齊齊哈爾は国境警備の要衝であり、宋らの任務は重要であつた。この時期に彼が担つた最大の任務と功績が一九〇四年に締結された「黒龍江省東省鉄路公司伐木条約」<sup>16</sup>に関するロシア側との協議であつた。『宋小濂集』前言及び成多祿『澹堪詩草』卷一の宋序文によれば、一九〇六年秋、東省鉄道管理局局長であつたドミトリー・レオニドヴィッチ・ホルヴァート（一八五八〜一九三七）との協議のため哈爾濱<sup>ハルビン</sup>に赴き、その後百四十余回の会議を重ねた末、ようやく合意に達したという。この間一年、単純に計算すれば、二〜三日に一度は顔を合せていたことになる。

会谈の結果、具体的にどのような合意に至つたのかは明らかでないが、宋がその後呼倫貝爾副都統に任命されているところから見ると、<sup>15</sup>このロシア側との交渉に関しては、一定の評価がされたと思われる。一九一一年には中口の代表が齊齊哈爾で会し、額爾古納河<sup>アルグン</sup>一帯の中口の国境について協議を行つたが、当時の責任者であつた黒龍江巡撫周樹模（一八六〇〜一九二五）の補佐として宋小濂の名前がある。この協議で水陸の国境が改めて定められ、年末、「中俄滿洲里界約」<sup>16</sup>が締結されている。

張徳元は呼倫貝爾時代の宋の業績として、（一）官制を整備し、行政管理を強めたこと、（二）歩哨所を整備し、兵士に開墾をさせたこと、（三）商工業の發展に尽力したこと、（四）学校を創設したこと、（五）軍隊を増強し、警察を整備したこと、（六）税務管理を嚴重に行い、財政収入を増やしたこと<sup>17</sup>を挙げているが、実際にはこれらの政策が漢化政策として蒙古の人々の反発を招き、清朝が滅亡するやいなや、「外蒙古独立を宣言するや呼倫貝爾は之と呼応して黒龍江省の巡撫に対して独立を宣言して外蒙古に応じた<sup>18</sup>」という事態となつた。この独立騒動に関してはロシ

アが裏で糸を引いていたといわれ、矢野は、「一九一五年中華民國の宗主権の下に独立を取り消すことになったのは、袁世凱の懐柔其が功を奏した結果でもあるが、袁世凱の懐柔が功を奏することが出来たのは、露西亜が呼倫貝爾の獨立運動から手を引いた為めである」と述べている。

中華民國が成立して官界の再編が行われ、黒龍江都督に任じられた宋小濂は、正にこの困難な時期に責を負うこととなった。『大事記』では、黒龍江都督に任じられた一年半後の一九一三年七月、病氣を理由に辞職を申し出、翌月それが認められた、とある。しかしそれから六年後、六十歳間近の一九一九年、宋は徐世昌（一八五五—一九三九）に請われ、東清鐵路督弁として再び二年間東北の政務に関わることになる。

一九二二年、ようやく職を辞した宋は、北京後海劉海胡同の恭親王の別荘を購入、修理し、「止園」と名付けてそこに住んだ。第二の詩集『東道集』<sup>25</sup>が刊行されたのもこの年である。彼は一九二一年に北京で結成された詩社「漫社」の特別会友となっていた。漫社の成立については潘静如「『清遺民』與北洋政府的依違離合——以漫社詩人群体為中心」<sup>24</sup>に詳しい。漫社を立ち上げた張朝墉（一八六〇—一九四二）は、清代には周樹模の配下、民国以降は黒龍江都督宋小濂の配下にあった。潘によれば、漫社は十余年の活動の歴史があるが、その間、嚶社、後漫社、庚社と名前を変え、また後漫社からは声社、穀社、棠社という分流も生まれたという。このうち、宋が関係したのが嚶社である。なぜ漫社が嚶社となったのか、詳しいことは不明だが、潘によれば、一九二四年になって漫社の同人達が病没したり北京を離れるなどしたため、集まりが少しずつ減少していったらしい。そこで宋が自身の居宅、止園に同人を集め、嚶社と名付けて月に一回、併せて十一回の詩会を催したという。だが嚶社は漫社に代わって立つ意図はなかったようで、一年後には再び漫社としての活動が再開されたらしい（後漫社）。

しかし北京での詩作三昧の日々も長くはなく、宋は一九二六年に北京で病没する。民国政府はその死を悼み、徐鼐霖に葬儀一切を仕切らせ、友人たちがその死を悼む詩を作った。<sup>26</sup>成多祿は「哭鉄梅四兄四首」<sup>26</sup>で、共に北京に家を構え、政治から距離を置いた環境で郊外に遊んだり、酒を飲んだり、詩を作りあったりした日々を懐かしむ。そして宋

の死の前日に催された詩社の集まりに、宋から「もう出られない」という伝言があつたということを、悲しみを込めて記している。

## 二

さて、呼倫貝爾副都統となつた宋は、一九〇九年の夏から秋にかけて呼倫貝爾全域を視察しているが、彼が涉獵した国境付近の雄大な自然の景観が読み込まれた『邊聲』収録の各作品の多くはこの間に作られたものと見られる。北京に止園を購入し、詩社に加わり、文人然とした生活を送っていた頃の作品よりも、『邊聲』には東北に生まれた詩人ならではの野趣に富んだ魅力があふれている。この時期の代表作として「呼倫貝爾紀事」（『邊聲』第三篇）がある。

興安嶺西北斗北 臚胸河外遼無極

興安嶺の西 北斗の北 臚胸河外遼かに極まり無く

黃砂滿地雪滿天

黃砂地に満ち 雪天に満つ 胡兒三万 威徳に服す

憶昔國家全盛時

憶う昔 國家全盛の時 異類と約束し鞭棰に随わしむ

河上誓碑界已定

河上の誓碑 界已に定まり 山頭の鄂博 石移し難し

此疆彼域各嚴守

此の疆彼の域各嚴守 誰か敢えて鴻溝を越えて走ることを試さん

一草一木戴兵威

一草一木兵威を戴き 碧眼赤髯皆手を縮む

牛羊遍野駝馬鳴

牛羊野に遍く 駝馬鳴き 千廬万落歛声騰る

沐日浴月二百載

沐日浴月二百載 四境従りて烽燧に驚くこと無し

「興安嶺」は東北を代表する山脈、「臚胸河」は現在の克魯倫河で、ウランバートルの東の山脈に源を発し、大興安

嶺のさらに西方、モンゴルとの国境に近い呼倫湖に大きく蛇行しながら注いでいる。「胡兒」は国境を侵犯するロシア人匪賊。清朝が勢いのあつた時代は国境に関するロシアとの外交交渉においても主導的立場を取り得た。克魯倫河の畔にはロシアとの国境を示す文言が刻まれた石碑があつたらしい。作者自注によれば「鄂博」とはモンゴル語で、陸路の国境を示す石の盛り土のこと。「鴻溝」は古代楚と漢を分ける運河、ここでは国境を指す。「碧眼赤髯」は言うまでもなくロシア人。かつて定められた国境を何としても守らねばならぬという、宋らの強い使命感と気魄に満ちている。「沐日浴月二百載」はこの地が二百年の間中原文化の薫陶を受けてきたことを指すと注(蒙秉書等)にある。「烽燧」は狼煙、清朝とロシアの間に結ばれたネルチンスク条約(一六八九年)が二百年の間守られてきたことを指す。

しかし、今清朝の前途は危うい。一八五八年、ロシアの脅威に屈した朝廷は愛琿条約を締結。これによりネルチンスク条約で中国領に確定していた黒龍江の北側はロシア領となり、ロシアの黒龍江航行権承認を余儀なくされた。また現在の沿海州は共同管理地となつた。さらに一八九六年、李鴻章が調印した露清密約において、ロシアは東北地域における鉄道敷設権、及び周辺の「鉄道付属地」における治外法権を含む様々な権利を獲得している。

世界風雲變倏忽	約書一紙來羅利	世界の風雲變ずること倏忽	約書一紙羅利來る
毀垣入戸建飛輶	穴山跨江通修轍	垣を毀し戸に入りて飛輶を建て	山を穴ち江を跨ぎて修轍を通ず
藩籬自撤墮國防	黃巾兆禍虜騎猖	藩籬自ら撤て國防を墮し	黃巾兆禍虜騎猖う
憑陵蹴踏等螻蟻	八年俯首飽豺狼	憑陵蹴踏すること螻蟻に等しく	八年首を俯して豺狼に飽く
即今亂定脫刀匕	龜蛇笑看飄輪駛	即今亂定まり刀匕を脱す	龜蛇笑いて看る飄輪の駛きを
部落星居自曉昏	山川甌脫誰疆理	部落は星居するも曉自り昏く	山川甌脫誰が疆の理ぞ

世界の情勢はあつという間に変わり、たった一枚の紙切れで羅利(悪鬼、即ちロシア)がやつて来た。「飛輶」は

汽車、「修轍」は鉄道、即ち東清鉄道を指す。「藩籬自撤墮国防」は露清密約をいうのだろう。「兆禍」は一九〇〇年の義和団の乱で、一八四年に起こった黄巾の乱に擬している。ちつぽけな虫けらどもが陵（中国の王朝）を踏みじり、一九〇〇年以降〇七年までここに居座ったロシア兵に対し為す術もなかったことは情けない（「八年俯首飽豺狼」作者自注）。一九〇七年は既に述べたように宋が哈爾濱でホルヴァートと条約を交わしたその年である。今世の乱は収まりはしたが、結局我が領内を疾駆する汽車（綱輪）をロシア人たちが（亀蛇）が満足げに眺めることを許してしまつた。各所に部落は点在しているものの人々はうち沈んでいる。「甌脱」はもともと北方異民族の敵を偵察するための土の穴蔵のことだが、ここでは中口国境付近の緩衝地帯を指すと注にある。緩衝地帯にまで、敵は入り込んでくるのであろう。

我武生愧李將軍	我才遠遜趙翁孫	我が武の生なること李將軍に愧じ	我が才の遠きこと趙翁孫に遜る
岩疆權鎮作都護	籌防拮据營邊屯	岩疆權鎮都護と作り	籌防拮据し辺屯を営む
千五百里渺人跡	山高溪深岩如壁	千五百里人跡渺か	山高く溪深く岩は壁の如し
陸無道路水無船	到此仰天長太息	陸に道路無く	水に船無し 此に至りて天を仰ぎて長太息す
仰天太息空疑猶	何如且爲尺寸謀	天を仰ぎて太息し空しく疑猶す	何如ぞ且くは尺寸の謀を為さん
裏糧分道据天險	開榛辟莽動綢繆	糧を裏み道を分かちて天險に据り	榛を開き莽を辟きて綢繆に勤めん
營巢驟見初基植	河干遍樹黃龍幟	營巢に驟見る初基の植	河干遍く樹つ黃龍の幟
隣族驚呼吉代來	官民相戒無妄肆	隣族驚きて呼ぶ	吉代來たりと 官民相戒しめ妄に肆にすること無し

「李將軍」は漢の文帝の時に匈奴を打つた李広、「趙翁孫」は李広に随つた趙充国。そもそも国境警備のために都護という役職が置かれたのは漢の時代であつた。それにしても国境警備は困難が多い。見渡す限り人の姿はなく、山や

川が立ちほだかり、先に進むうにも道はなく、川を前に船もなく、ただ空を仰いで嘆息するのみである。しかしそうしていてもしかたがない、何とか知恵を絞って解決策を考えなければ。そこで食料を携帯し、生い茂る草木をかき分け、険しい自然に挑み、未然に禍を防ごうとする（綱繆）。川岸には人々の生活の様が見えるが、そこはそもそも初めに中国側の領土と定めた所、遍く清の皇帝の象徴である「黃龍幟」が立てられている所だ。「ロシア人は華人を吉代斯と呼んだ」という自注がある。「隣族」とは蒙古族のこと。漢民族（官）と蒙古族（民）とは互いに法を守って生活している。ロシア人たちとは異なる、といたいのだろうか。

回頭切切語我蒙

頭を回らせて切切と我が蒙に語る

尚武無忘先代風

武を尚ちよとび先代の風を忘ること無かれと

有馬可騎羊可食

馬有れば騎る可し 羊は食らう可し

同仇共憤圖邊功

仇を同ともにし憤りを共にして辺功を凶らん

魯陽揮戈日爲返

魯陽戈を揮えば日なみ為に返る 牢を補うも亡羊の晚きを恨むこと莫かれ

吁嗟呼

ああ

亡羊補牢雖已晚

餘羊尚在庶幾免

亡羊補牢已おそに晚いしと雖いども 余羊尚在らば免いぜられんことを庶幾す

蒙古族（我蒙）に切々と呼びかける。お前たちの先祖の勇姿を忘れるな、先祖の残した文化を継承せよ、誇り高い蒙古族としての生活を守るためにも我々と手を組んで国境をしっかりと守っていかう。かつて魯陽が戈を振るって太陽を呼び戻したように、取り返しのつかないことになる前に手を打とうではないか。時既に遅くはあるけれども、まだ残っている羊がいるのだから、それを守るために囲い（牢）を作ろうではないか。蒙古に対する、「同郷者」としての親しい思いがうかがえる。

各詩には創作年代が明記されていないため時期は特定できないが、国境を視察した時のことをうたった「登阿巴哈依圖嶺審視中俄國界」(『遍聲』第十九篇)の前半部分には雄大な辺境の自然が描写されている。

群山西來行逶迤

一山突兀餘陂陀

群山西より來たりて行くこと逶迤たり 一山突兀して余は陂陀

昂頭駐瞰平野闊

草青沙白亂流多

頭を昂げ駐まりて瞰れば平野闊く 草青く沙白く乱流多し

下馬策杖凌絶頂

凭臨萬象爭紛羅

馬を下り杖を策ぎて絶頂に凌り 万象の紛羅を争うを凭臨す

東來長蛇海拉爾

蜿蜒奔赴山足過

東より來たる長蛇は海拉爾 蜿蜒として奔赴し山足を過ぐ

地形中高南北下

審觀水勢一可

地形は中高く南北下がり 審らかに觀る水勢の一可なるを

縷視小渠向南溢

乃是達蘭鄂落水

縷視す 小渠の南に向かいて溢るるを 乃ち是れ達蘭鄂落水なり

中流北轉曰額爾古納河

中流は北轉し額爾古納河と曰う

以手運物作磬折 循名求實無差訛

手を以て物を運るに磬折を作す 名に循い実を求むるに差訛無し

題名の「阿巴哈依圖」は地名。満洲里の東、呼倫湖の北の、海拉爾河が大きく蛇行するあたりで、度々ロシアとの紛争が起こっていた。曲がりくねった山道は馬では行けない。しかし杖を突きながら登った頂上からの眺めは絶景だ。東から流れる海拉爾河は呼倫湖の北で山裾を巻くように大きく蛇行し、湖に流れ込む一部を除き、ほとんどが北行して額爾古納河となる。「達蘭鄂落水」は呼倫湖のことを指すのだろう。その蛇行の様はあたかも人がものを手渡すときに体を折り曲げる、その姿のようである。

このような困難な巡視では野營が当然であった。「額爾古納河岸野宿」(『邊聲』第二十二篇)という作品がある。

山蒼蒼 河洋洋

連天沙草落日黃

山は蒼蒼

河は洋洋

連天の沙草落日黄なり

牛鳴馬嘯人在野 氈廬布帳須臾張

牛鳴き 馬嘯き 人は野に在り 氈廬の布帳須臾にして張り

斃坎駕輓饜晚食 折蒿熬火燒羔羊

坎を斃ちて饜を駕せ 晩食を爨く 蒿を折り火を熬し 羔羊を焼く

抽刀割肉恣飽啖 笑談驚斷歸鴻翔

刀を抽き肉を割き 恣に飽啖し 笑い談れば帰鴻の翔ぶを驚斷す

飯罷吏士藉草臥 駢聲齊入黑甜鄉

飯罷り 吏士草を藉きて臥す 駢声斉しく入る黒甜郷

嗟餘平生慣行役 水霜雨雪無弗嘗

嗟余平生行役に慣れ 水霜雨雪嘗め弗ること無し

即令筋骨漸衰老 若論意氣猶飛揚

即ち筋骨を令て漸く衰老せしむるも 若し意氣を論ずれば猶飛揚す

今日巡邊按斥墩 草肥馬健爭騰驤

今日巡辺斥墩を按じ 草肥え馬健に騰驤を争う

正好野盤趁秋暖 五更夢到黑水傍

正に野盤を好み秋暖を趁う 五更夢は黒水の傍に到る

危途巉岩不能阻 精神直欲周邊荒

危途巉岩も阻むこと能わず 精神直ちに欲す 周辺の荒たるを

豈知局促不稱意 簿書法令徒周章

豈知らんや 局促として意に称わざるを 簿書法令徒に周章

二三奇傑善謀國 掛讓謂可格虎狼

二三の奇傑善く國を謀り 掛讓して謂う 虎狼格す可しと

人生縱意在八表

人生意を縦にするは八表に在り

安能縮首偃息覓帷房

安んぞ能く首を縮め息を偃めて帷房に覓れん

坐銷壯志負昂藏

坐して壯志を銷し昂藏に負かん

連れてきたものか放牧されているものか、牛馬が元気に跳ね回る中でテントを張る手際は慣れたもの。テントが張れると早速炬を作って食事の支度だ。焼き上がった子羊の肉を蒙古式にナイフで削り取って口に運ぶ。困難な任務ではあるが一行は意気軒昂だ。どっと上がる笑い声に渡り鳥の群れが驚いて列を乱す。腹が膨れると草の上に寝転がり、たちまち鼾をかいて夢境（黒甜郷）に入る。この時作者は五十前後、自身が若くないことを思うが、気持ちはまだ負けていない。役所で文書と向き合うよりは外を歩き回るの方が性に合っているようだ。注では「黒水」は黒龍江、

「周章」は大変手数がかかること。作者の意気軒昂なこともさることながら、なかなか楽しそうではないか。しかし、この地方での野宿について前述の藤山は「この漠々たる無辺の草原を旅するものが必ず経験するやうに、夜のキャンブは如何にも怖しく、翌朝地平より太陽の登る時の嬉しさと平安は筆舌に尽せぬ」と書いているのだ。

### 三

しかし一九二〇年と二二年の、東清鐵路督辦時代の作品集『東道集』からはこの勇壮な心意気が消える。宋はこの時期滿洲里から綏芬に至る幹線と哈爾濱から長春に至る支線を視察し『巡閱東省鐵路紀略』を著しているが、『北徼紀游』が当地の自然環境や人々の生活を親しく觀察、記録しているのに対し、『巡閱東省鐵路紀略』は單なる報告書である。彼が視察の先々で何を見、何を感じたかは、『東道集』から察するしかない。

『東道集』第七篇に「秦皇島」と題した詩がある。

莽莽秦皇島	征輶瞬息過	莽莽たる秦皇島	征輶は瞬息にして過ぐ
東南滄海闊	西北亂山多	東南滄海闊く	西北亂山多し
絶世雄風渺	連天巨浪磨	絶世の雄風渺かに	連天の巨浪磨く
幾多消暑客	沈酔水雲窩	幾多の消暑の客	水雲の窩に沈酔す

秦皇島は当時から貴人や外国人たちの避暑地であった。「征輶」は旅の車のことと注にある。次の第八篇が「歸吉林」であるから、詩が時間軸に従って収録されているとすれば、故郷に歸る汽車の旅の途中であるのかもしれない。目に映る景色が違うといえはそれまでだが、「絶世雄風渺 連天巨浪磨」にその片鱗は見えるものの、『邊聲』に比べると

風景描写のスケール、力強さ、そして何よりその景観の中に身を置く喜びや誇りが感じられない。

また『東道集』第三十篇に「憶昔」と題する作品がある。興安嶺、呼倫貝爾、滿洲里など、宋がかつて歩いた地方を懐かしんだもので、序文に「秋から冬に向かう頃、哈爾濱から滿洲里まで鉄道を巡閲したが、昔遊んだ場所で、胸が詰まって作った」とある。その第二篇と第三篇を挙げる。

憶昔鎮呼倫 相將三四載 憶う昔 呼倫に鎮し 相將て三四載にならんとするとき

恩信洽胡兒 蓄牧無驚駭 恩信胡兒に洽く 蓄牧驚駭すること無し

去此十三年 今來人事改 此を去りて十三年 今來れば人事改まる

叛服何所爲 我心憐爾呆 叛服何の爲す所ぞ 我が心爾の呆を憐れむ

撫茲葬亂餘 回憶得無悔 茲を撫して乱余を葬るは 回憶して悔無きを得んや

獨有西山松 青青猶宛在 獨り西山の松有るのみ 青青として猶宛ら在るがごとし

呼倫貝爾で任にあつた三、四年、ロシア人たち（胡兒）にも清朝の威光は及んでいたし、人々の生活も平和であつた。しかし十三年後再び訪れた呼倫貝爾は様子がすっかり変わつていた。「叛服何所爲 我心憐爾呆」は清が滅亡し民国に変わったこと。その時代の波に翻弄された自身を哀れんでいるのか。自分がここで苦労したことには一体どういう意味があつたのだろうか。呼倫貝爾の西の山には古い松が多かつた、と自注にある。その松だけは昔のまま、青としてしている。

憶昔理疆界 久駐滿洲里 憶う昔 疆界を理め 久しく滿洲里に駐まりしとき  
侵軼杜強隣 不辭冰雪履 侵軼して強隣を杜ぎ 冰雪を履むを辞さず

窮探古納源 細辨鄂博跡

窮探す古納の源 細弁す鄂博の跡

邊圍幸保存 國勢忽披靡

邊圍幸にして保存せらるるも 國勢忽ち披靡す

今朝巡路來 遠馭輾輪駛

今朝路を巡りて來たり 遠く輾輪の駛せるを馭す

安得竟全功 異域車同軌

安んぞ得ん全功の竟るを 異域車は軌を同じくす

滿洲里でも国境を守り、ロシアの侵入を許さなかった。「古納」は額古納河でその源流からが水路の国境、「鄂博」は前述のように陸の国境を示す。それらは幸いにまだそのまま保たれてはいるが、国の勢いはもはや日に日に衰え、目を覆うばかり。東清鐵道を走る汽車（輾輪）に乗ることを「馭」と表現するところに、馬に乗って山を越え、草原を駆けた昔日を懐かしみながら、かつての王朝の威光が消滅してしまつたことに意氣消沈している宋の姿が見える。時既に南滿洲鐵道会社が成立している。中国を走る鐵道が、かたや日本、かたやロシアに牛耳られている。かつて親しんだ土地ではあるが、景觀に関する作者の関心は明らかに薄れている。それは、その地を遠く離れたという物理的な理由だけでなく、自分たちが命をかけ、誇りを持って守つたその地が、清朝滅亡の後、国の力も、人々の意識も変わつていく中で、精神的にもいよいよ遠くなつてしまつたことを感じていたために違いない。次に挙げる詩は第六篇「出都」である。鐵路の巡視に出発する時に作られたものだろうか。

鼙鼓聲中正出都 故人握手各相呼

鼙鼓聲中正に都を出づるに 故人握手し各相い呼く

貪狼瘦獺乘風起 社鼠城狐据地呼

貪狼瘦獺風に乘じて起こり 社鼠城狐地に据りて呼ばわる

倉猝離亭双關迴 傍徨繞屋一人孤

倉猝に亭を離れ双關迴か 傍徨し屋を繞るも一人孤なり

諸公漫作傍觀客 大厦將傾要共扶

諸公漫りに作る傍觀の客 大厦將に傾かんとして共扶を要す

「鞞鼓聲（攻め太鼓の音）」は二〇年七月の安直戦争をいうのだろうか。北京を出発する際、友人たちと互いに手を握り世を憂えたのだった。注に、「貪狼」句は日本帝国主義がパリ講和会議に乗じて山東を飲み込もうとしたこと、「社鼠」句は国内の軍閥割拠を指すとある。慌ただしく屋敷を後にし、都を遠ざかる。北京で共に詩作を楽しんだ友人たちからも離れ、今はたった一人だ。皆はこの混沌とした世情をただ傍観するのみだが、今こそ共に手を携え、倒れようとしている建物（大厦）を支えなければならぬのではないか。『邊聲』では専ら国境を侵犯するロシア人への警戒がうたわれたが、今は日本の脅威にも留意しなければならぬ。さて、この「大厦」を果たして「国」と読み替えることができるだろうか。

東清鐵路は南行すれば即ち満鉄である。『東道集』には日本人との交流を示す作品が五篇含まれている。一篇は関東庁長官山縣伊三郎（一八五八〜一九二七）、四篇は満鉄社長早川千吉郎（一八六三〜一九二二）との交流を示したものである。早川は宋が大連に赴く際、迎えの特別列車を仕立て、星が浦などで芸者を呼んで大宴会を催したようだが、作品はいずれも儀礼的なもので、深みは感じられない。

### おわりに

宋の初期の作品集『邊聲』に描かれた荒々しい辺疆の景観と、辺疆を守ろうとする使命感、誇りが『東道集』ではほぼ消滅している。それには年齢的な「諦観」も影響しているかもしれないが、やはり一つには呼倫貝爾での自身の政策の失敗に対する挫折感、もう一つには民国成立後の混乱に対する失望感、厭世観がそのような心理状況を引き起こしているのではないか。

成多祿の「哭鉄梅四兄四首」第三首にこのような句がある。

城西城北各爲家

十載春明紀夢華

城西城北各家おのゝを爲し

十載の春明は夢華しるを紀す

一局棋枰觀壁上

滿襟涕泪又天涯

一局の棋枰壁上に觀

滿襟の涕泪又天涯

「澹堪年譜稿」及び「統澹堪年譜稿」<sup>31)</sup>によれば、成は一九二三年秋、家族とともに北京の西城区に居を構えている。

前年宋が居を定めた止園は北京城の北側である。「十載」は恐らく、一九一三年に宋が北京に赴任して以後六年を過ぎたことに止園での数年を加えているのであろう。注によれば「春明」は長安城の門の名であるがここでは北京を指す。成の年譜には宋との詩作を中心とした日々が記されている。それによれば成は宋に詩集の校勘を依頼し、宋は彼の詩集『澹堪詩草』の跋を書いている（一九一四年）。誕生日には宋と徐が酒盛りを開いてくれたり（一九一七年）、宋が自宅に招いてくれたり（一九一九年）、止園が完成すると、立春の日に漫社の詩人たちと共に招かれたり（一九二二年）と、親しい交わりが続いたようだ。一九二四年に宋、徐と三人で撮った写真が今も残る。詩の第二聯「觀壁上」は、時局の変化を冷やかに傍觀する意と注にある。前出の宋「出都」に見える「諸公漫作傍觀客」と通じている。

宋が守ろうとしたものは何か。それは彼が生まれ育ち守った東北という土地であり、人々であり、そこに生活している同郷者としての少数民族たちではなかったか。それであればこそ、民国成立後も高齡を押して東北勤務を受諾したのではなかったか。であれば宋は「愛國詩人」ではなく、むしろ「愛郷詩人」と称されるべきであらう。彼はあくまでも東北を中心に世界を見ていた。彼にとつて「国」と呼べるものがあるならば、それは侵入者から東北を守ってくれる強大な力であったと言えよう。満洲国成立を彼がもし見ることがあれば、どのような感慨を持っただろうか。

成多禄や徐鼐霖に東北を描いた作品がほとんど見られないとはいえ、宋と同じく東北に出自のある彼らの作品にまで分析が及ばなかったことは今後の課題である。また本稿では紙幅の関係で言及できなかったが、「日華共存、日華共榮」を掲げて満鉄に赴任した早川と宋の間に、いかに儀礼的であれ、どのような交流があったかについても興味深

い。『北徼紀游』に登場するのはほとんどが当地の少数民族かロシア人であるが、日本人の「妓女」に触れた部分がある。ロシアのアムール省にはロシアの妓楼と日本の妓楼があり、彼は日本の妓楼に登ったことがあるようで、ロシアの妓女は顔の彫りが深く金髪碧眼で見られたものではないが、日本の妓女は眉目秀麗で中国人と全く変わらず、髪も美しく、古の美人の風があると評している。また日本人は男女を問わず清潔好きで毎日沐浴し、薄汚れた服を着ている者は一人もいない、と高く評価している。その彼が、東省鉄路督辦として日本人たちとどのように付き合い、どのような印象を持ったのか。日本側の資料も含め、今後追及していくことは我々日本の研究者の使命でもある。

注

- (1) 「奉天及北陵」(『七十八日遊記』一九〇六年、民友社)。
- (2) 「滿支の旅」(『草画隨筆 滿鮮と支那』一九三四年、交詢社)。
- (3) 『滿洲——起源・植民・霸權』一九九一年、御茶の水書房。
- (4) 『滿洲の地理学』(建国読本 第二編)一九三九年九月、滿洲帝国教育会。
- (5) 「西曆十七世紀の後半から十八世紀の前半にかけて、滿洲の奉天、錦州、興京、吉林、寧古塔、阿爾楚喀、伯都訥、黑龍江(愛理)、墨爾根、齊齊哈爾等は將軍、副都統等、滿洲官憲の所在地となつたのであるが、それと共に支那人の商売、工匠、傭工、從僕等が入込み、支那人街たる基礎は漸次築かるるに至つた」(稲葉岩吉・矢野仁一『世界歴史大系十一 朝鮮・滿洲史』一九三五年七月、平凡社)。矢野仁一は清朝に招かれ北京法政学堂に勤務した経験を持つ東洋史研究者である。
- (6) 一九八八年、遼沈書社。
- (7) 柳成棟「黑龍江的詩社」(『黑龍江史志』第三二七期、二〇一四年四月)は清から民国にかけて、当地では詩社の活動が活発になつたとし、清末に成立した詩社として七子詩社(一八六五年成立、寧古塔)、梅花詩社・菊花詩社(一八七八年頃成立、齊齊哈爾)、松江詩社(三姓)、塞鴻詩社(一八八七年成立、漠河)を挙げる。

(8) 筆者が本稿作成に当たって参照した先行研究は以下の通りである。

黄紀蓮 「宋小濂関於漠河金鉞的幾首詩」(『黑河学刊・地方歴史版』一九八五年二期)

張玉興 「晚清黑龍江愛國詩人宋小濂」(『黑河学刊・地方歴史版』一九八八年一期)

陳章范 「宋小濂籌邊思想及安邊事略」(『中国辺疆史地研究』一九九四年第四期)

焦宝 「『吉林三傑』詩歌研究初探」(『社会科学戦線』二〇一三年八期)

秦麗榮 「『吉林三傑』精神文化內涵研究」(『文物鑑定與鑑賞』二〇一八年七期)

王琳 「『吉林三傑』之宋小濂詩歌中的愛國主義情懷」(『当代旅游』二〇一八年十一月)

(9) 一八八八年に李金庸の幕府に入つて以降の記録。一九九一年手稿本、一九八四年、黒龍江人民出版社。

(10) 一九八九年、吉林文史出版社。『北徼紀游』などの他、『邊聲』(一九一一年)、『東道集』(一九二二年)、『晚学齋詩草』

(刊行年不明)の三冊の詩集を集める。

(11) 一九八七年、吉林文史出版社。

(12) 『黒龍江史志』二〇一四年四期(総第三二七期)。

(13) 生卒年不明。東北に招かれた当時は、湖北鶴峰州知府であつたという。号は建生、江蘇省武進出身というが、李金鏞

の出身はその隣の江蘇省無錫である。

(14) 「和子由澗池懷旧」。蘇軾が任地に向かうに当たり、弟蘇轍(子由)から送られた詩に和して作られた作品。人の命は

鳥が雪の上に残した足跡のようなもので、鳥が飛び立てば何も残らない、という意。

(15) 『宋小濂集』「前言」によれば、早くに父親を亡くした宋は、二十八歳の時、老母と妻、娘の生活を支えるため、軍隊に入つたとあり、当時既に結婚してゐたと思われる。ただし『邊聲』に、亡くなった妻を悼む詩(第十七篇「六月十六日晚將赴辺勘界別亡再繼室夫人柩」、第二十七篇「哭亡再繼室庄菜筵」)があるので、再婚したのかもしれない。なお「哭亡再繼室…」詩に、占師によれば、自分は三人妻を持つということだったが、その通りになつた、という自注がある。

(16) この記述は『大事記』によるが、麻田雅文『中東鐵路経営史』(二〇一二年十一月、名古屋大学出版会)の詳細な調査の中にこれに関する記述は見当たらない。『通史』によれば、「黒龍江省東省鐵路公司伐木条約」は、陸路では成吉思汗駅から牙克石駅までの鉄道の両側、長さ六百里、幅六十里の地域、水路では呼蘭、諾敏のそれぞれ水源から長さ三百余里、幅百余里の地域と、濃濃、椴林のそれぞれ水源から長さ百六十〜七十里、幅七十里の地域の森林伐採権を東省鐵路公司側、即ちロシア側が有するというものであった。

(17) 一九一四年、成多禄が宋小濂に自身の詩を送り、校勘を依頼して編まれたものという(『成多禄集』「澹堪年譜稿」…一九八八年、吉林文史出版社)。

(18) 『宋小濂集』前言では、任命は一九〇七年、『澹堪詩草』宋序文では一九〇八年である。

(19) 『大事記』による。

(20) 「宋小濂在呼倫貝爾」(『東北地方史研究』一九八七年第一期)。

(21) 満鉄庶務部調査課『洮南、満洲里間蒙古調査報告書(第一班) 第一編 総論、沿道の概況、各村邑、洮満鉄道の価値、其他』(一九二五年)。

(22) 『近代蒙古史研究』大正一四(一九二五)年七月、弘文堂書房。

(23) 一九二〇年〜二二年の北京時代の作品を集める。

(24) 『詩書畫』(<http://www.shishuhuaazhhi.com/Part.aspx?nid=4&pid=12&id=845>)。

潘は一九二二年、一三年に『漫社集』三集と『補遺』が編まれたとし、そこに掲げられた「社友名録」には十三名の同人の名前があり、成多禄の名も見えるが、宋と徐隴森の名は無いという。

(25) 成多禄「哭鉄梅四兄四首」注による。

(26) 『澹堪詩草』卷三所収。この詩集は友人の序文も付し、出版する準備がされていたが、生前にはかなわなかった。『成多禄集』(一九八八年、吉林文史出版社)所収。「鉄梅」は宋の字である。

(27) 『呼倫貝爾邊務調査報告書』(一九〇九年鉛印、『宋小濂集』所収)はその報告書である。

(28) 『宋小濂集』前言では一八八八年から二十三年間の詩文を収録した、とある。「自序」では、〇七年に呼倫貝爾に派遣され、それから二年、国境警備について力を尽くし、また、国境付近を調査したが、そこで感じた悲憤をどうしても抑えることが出来なかつた、一九〇九年と一〇年に作つたものが多く、ここに収める、といっている。

(29) 「靚」字は辞書に採し当てることができなかつた。テキスト自体にも作字の跡が見られるが、他の版本を見ることができないため、比較、確認もできなかつた。ここでは詩の意を酌んでこのように読んでおく。

(30) 『満洲の地理学』。

(31) いずれも『成多祿集』(一九八八年、吉林文史出版社)所収。

(32) 徐鼐霖「止園落成次原韻」夏潤生注(『徐鼐霖集』)。